ハッピー・エンディング

あさがやすみや

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ハッピー・エンディング

【Ｎコード】
Ｎ１６６７Ｏ

【作者名】
あさがやすみや

【あらすじ】
病室で寝たきりの少年のところにやってきた編集者田所。
ベッドの上で小説を書いている少年に連載を頼みにくる。
小説の力でなんでもできると嘯く少年に対し、田所は卑劣な仕打ちをする。
しかし少年は連載を承諾する。
自分の力を誇示するために。
少年の書く小説のタイトルは、ハッピー・エンディング。

終わりのはじまり

携帯電話の音が途切れがちだ。
「こんなジジイに頼るなんざあ、相当ひどい事態なんだな」
電話の向こうのシゲさんの声にはざあっと雑音が混じる。
車の速度を出しすぎなのかもしれないと思ったが、アクセルを緩めなかった。
「この事態に、タイトルをつけるなら、なんだい？」
「そうですね、まさしく、ハッピー・エンディングってところですよ」
ちょっとくらい車飛ばしてみたところで大した意味はない。しかし急がずにはおれなかった。
＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝＝

君たちに人生を教えてあげるよ。幸せになるなら、僕のいうとおりにすればいい。

「壮絶に偉そうな書き出しだな、少年」
「そうかい？でもこれくらいでいいのさ」
病室のベッドの上で、少年は無表情だった。
「今の時代、少しくらいスティミュラスじゃなくっちゃいけないんだ。
教えておいてあげるよ、なんだっけ、確か、田所さんだったかな」
「そうかい、俺もひとつ教えてやるよ、
俺は英語を誇らしげに使う奴が死ぬほど嫌いなんだ。」
懐手をしたまま、少年に背を向けた。病室の窓からは近所の高校が

よく見えた。
グラウンドではしゃぐ声が窓ガラスを抜けて漂ってくる。

「おじさんの用件は、なんなんだっけ？」
「さっき言ったろ」
「もう一度言ってみたらどうだい」
少年は腹の上においたノートパソコンを打ち続けた。
キーを打つひとつひとつの音が、癇に障った。
「ぜひうちの出版社で続き物を書いていただけたら、と思いましてね」
「そう。でもおじさんはあんまりそうしたくない様子だ」
背中向けたまま人にお願いするなんてことがあるかい、と少年は言った。

返事もせずに、煙草に火をつけた。
「病室だよ」
「そうらしいな」
「消せよ、僕は病人なんだぞ」
「俺もニコチン中毒なんだ、同じ病人同士、仲良くしよう」
ふうっと煙を天井に向けて吐いた。

「連載の承諾をいただいていいかな、とっととこんなところを出たいんだが」
「あんた、面白いよね」
少年は言った。
「ここに来る連中はね、みな気の毒そうに僕に聞いてくるんだ。私にできることがあったらなんでも言ってね、できる限り力になるからって」
そうして、何もしてくれやしないのさ、と付け加えた。
「俺のせいで君が病院送りになったなら、俺もそうするだろうな。

どっちにしろ、君のために何かしてやる義理はないんだ」
返事をする代わりに、少年はくっく、と押し殺したような笑い声をあげた。

「ちょっとは話ができそうだね、おじさん。
人生を分かってない奴ばかりだから退屈していたところだよ」
「少年は随分世の中をご存知のようだね、
ベッドに張り付いてばかりいるのかと思っていたが」
「まぜっかえすなよ。僕はよく人生を知っている。深い深いところまでだ。
たとえば、おじさんは本気で人を殺そうと思ったことは、あるかい？」
少年の目にはある光が浮かんでいた。自己顕示欲と破壊欲に歪んだ光だ。
若い奴にはこういう種類の人間がよくある。この世の全てが思いどおりになると
信じ込んでいるのだ。
「幸いなことに、ないね」
あるとしたら、それは今が初めてだろう。
「不幸なことに、ないのかい」
いいかい、と少年は続けた。諭すような口ぶりが腹立たしい。

「よく漫画や小説で、殺意を抱いた人間が相手に激昂し、血管を浮かび上がらせているけれど、
あれは嘘さ。本当の殺意はね、もっと静かなのさ。声が遠くなる。
血はむしろ下がって、頭はまっしろだ。怒りはない。怒りと殺意はまったくの別物だ。
声は遠くなるが、映像はとてもビビッドでそしてスローリーになる。
相手の瞬きも分かるほどだ。
殺してやる、なんて意気込みはない。落ちた消しゴムを拾うのと同

じくらいの気軽さだよ。
あるいは、家に帰ってから靴下を脱ぐのと同じくらい、決まりきったことのように、
ただ殺そうと思うものなんだ」

早口に少年はまくしたてた。少年の体からは淀んだ熱が放射されているかのようだった。
ベッドに縛られていても、肉体は若いのだ。
行き場をなくしたエネルギーが湧き上がっているようだった。

「でも君に、人は殺せない」
「そりゃあ、僕自身の体では無理さ」
少年は腕をあげた。
袖がはらりとまくれると、枯れ枝のような白い腕が露になった。
「けど僕には、これがある」
少年は誇らしげにパソコンを持ち上げてみせた。
「これで僕は人を幸せにも不幸にもできる。もちろん殺すこともだ」
「ほう、それは物騒だな」
いい加減この不毛なやりとりにうんざりだ。
煙草の煙を少年の顔に吹きかけると、パソコンを取り上げて、
彼の手の届かない窓際の台の上に置いた。
「こうしたら、どうなるんだい？」
「返せ、この野郎、殺すぞ」
少年は激昂して叫んだ。

「おや、殺意って奴はもっと静かなものじゃなかったのか」
そう吐き捨てて病室を出ていこうとすると、
いきなり停電したように目の前が暗くなった。頬に痛みが走った。
前を向き直すと、興奮した様子の若い女の看護士が立っていた。

「なんてことをするんです、祐一くんの宝物に」
看護士は窓際に走ってパソコンを取り戻すと、少年の下に返した。
「病室で煙草まで吸って。どういう了見ですか」
脳天に突き抜けるような声だった。女と子供は腕力がない分、とにかく声を出す。
「女性に平手打ちを食らったのは、そういえば人生で初めてだ」
笑ってみたが女は笑わなかった。笑うところではどうもなかったらしい。
こっちとしては、笑うしかない気分だったのだが。

とにかく編集長に報告しなければならない。
編集長が見つけてきた金の卵は、
誇大妄想持ちのひねっくれたクソ餓鬼で、
原稿なんざ便所紙にもなりゃしません。
編集長の怒りに任せて灰皿を投げつけてくる姿が目に浮かぶ。

「失礼したな」
出ていこうとする私に、少年の方から声をかけてきた。
「おじさん、いいぜ」
振り向いたが、左側の視力がまだ戻らない。女め、思い切りひっぱたきやがって。
面倒だが、体ごと向き直して、少年を見返した。

「なにがいいんだ」
「連載の件だ。やってやるよ」
「祐一くん、よしなさいよ。他のところにしたほうがいいよ」
女は首をぶんぶん振った。興奮が解けて怖くなってきたのか、声がうわずっていた。
男をひっぱたいたなんてことは初めてだったんだろう。

「いいんだ、面白いじゃないか」少年は言った。

「僕の力を見せてあげるよ」

今構想中の小説を、あんたのところから連載してあげようじゃないか。

少年は痩せてくぼんだ瞳をぎろりと向けてきた。

「タイトルも決めてある。ハッピー・エンディングだ」

玉子焼きから

朝起きると体がいつも動くことを拒否する。
前日の酒が抜けていないせいか、
それとも吸いすぎた煙草のせいだろうか。
それでも酒も煙草もやめる気にはさらさらなれなかった。

部屋にはテレビとパソコンがおいてある。大きな物はそれだけだ。
砂漠のようにがらんとしている。残りは押入れにすべて突っ込んである。
元来がさつな性分であるが部屋をきれいにしておくことだけはこの十年守ってきた。
なんのために？
なんのためにだろう。

文芸の仕事の編集者として働き出して、随分になる。
しかし小説は読まない。
もう読まなくなってしまった。あんなものを読んでも一向賢くもならないし、
生活の足しにもならないと気がついた。
所詮、絵空事なのだ。
絵空事なら、もうたくさんだ。
部屋をきれいに片付けていること。これだって絵空事だ。
片付けていたって、何が起こるわけじゃない。
絵空事は、これひとつでもう十分だ。

テレビをつけると、朝から元気に、
岬とかいう女子アナウンサーが今日の天気を伝えている。

晴れ時々くもり、ところによっては雨だという。
霞んだ頭で、そのままぼうっとテレビを眺める。
あと十分ほどで支度を始めなくてはならない。

「岬さん、それでは、今日のトピックをお願いします」
「はい、今日のトピックは、最近話題のインターネット小説についてです。
みなさんは、ハッピー・エンディングという作品を読んだことがありますか？」
目が、一気に覚めた。

「今これが、インターネット小説部門で、一気にトップに踊り出てきたんですよ。
登場するや否や、追いつけ追い越せの、まさにハイセイコーです、ハイセイコー」
「岬さん、ハイセイコーたあ、古いことを知っているね」
司会の男が苦笑いする。
「筆者が、進行性の病気に冒されたまだ十五歳の少年、ということも話題のひとつになっています」
「ああ、この少年は僕知ってます。ちょっと前から有名にはなっていたんですよ」
スタジオのコメンテーターのひとりが得意になって語り始めた。
「神がかっているというか悪魔じみているというか。文章ひとつひとつは、
どこか宗教チックで、つかみどころがないんですがね。
読んでいるうちに引きずりこまれていくんですよ。魔法ですね、あれは」

まだ連載を始めて二日しか経っていない。仕組まれたかのような

反応の早さだ。
なんにせよ、こんな不快なことはない。あの少年のしたり顔が目に浮かぶようだ。
「岬さんは、読まれてどうでした？」
「えっと、私は実はまだ読めていないんです」
「読んでないの？駄目じゃない、勉強不足ですよ」
「近日中に読ませていただきます、すみません」
岬アナは笑顔で甘えた声を出した。
「でもすごい反響なんですよね、人気があるっていうだけではないんです。
もうこのハッピー・エンディングがあるから生きていけるっていう人も、
多いんですよ」
「連載始まったばかりっていうのに、すごいね。教祖様だまるで」

くだらない。世間知らず少年をこうして持ち上げていいことなんてひとつもない。
増長してますます鼻持ちならない人間に育っていくだけだ。
そう言いながら、同時に自分が少年にした仕打ちを思い返してみる。
他人のことを言えた口でもない、か。とにかくこれ以上、このニュースを見たくない。

リモコンに手をかけるとドアが開いて、待って、と声がかかった。
「この人あれでしょ、祐一って人でしょ？私と同い年の」
「真美か、学校はどうした」
「今日は休みだって言ったのに」
真美は私が起きるずいぶんと前から家事をしていたらしい。右手にはフライ返しが握られていた。
得意の玉子焼きを作っていたらしい。ほどよく焼けた玉子の匂いがドアの外からぷんと香った。

「この人結構前から真美の周りで話題になってるよ」
「へえ、そうかい。こいつの担当編集者になっているんだ」
「すごいね、でも真美小説は読んでないんだ。漫画の方が好きだし」
「小説なんて、無理して読むようなものじゃないさ」
どれ。早めに準備をして、真美の作った玉子焼きをいただくとしよう。
そういうと、真美はうん、と元気に頷いた。
「今日の玉子焼きはほんとに上出来、自信作」
真美は半分踊るような足取りで台所に向かった。
相変わらず真美は玉子焼き以外は何も作れない。が、同じものばかり作るせいか、
玉子焼きの腕前は大したものだった。
台所から、鼻歌と、玉子焼きを切り分ける音が聞こえてくる。

女は嫌いだ。子供も嫌いだ。くだらないことで笑いくだらないことで笑うからだ。
常々そう思っていた。
しかし真美を見ていると、その考えが間違っている気がしてくる。
俺はいつから、くだらないことで笑えなくなってしまったんだろう。

兆候（前書き）

会社についた田所。
しかし編集長の様子がおかしい。会社全体の空気もどこか違っていた。
少年の吐き捨てた言葉が蘇ってくる。

兆候

「相変わらずの重役出勤だな、田所君」
会社に着くなり、編集長が出迎えてくれた。
待ち構えていた、と言ったほうがよいか。
「昨日は徹夜でしてね、午後出勤の許可はもらっていたと思いますが」
「いいさ、いや、いいんだ。そんな瑣末なことはもうどうでもよくなった」
鬼編集長らしくもなく、表情は柔和だった。右手には新聞が握られていた。
「君が担当のハッピー・エンディングが、記事に取り上げられているぞ」
「おや、テレビでもやってましたよ。仕組んだような早さですね」
「仕組んだのさ、私から働きかけたんだ。ある程度だがね」
どおりで早かったわけだ。しかし編集長がそんなお節介をした話は聞いたことがない。
「担当として、鼻が高いですよ」
適当な返事をして、編集長に背中を向けた。
上着を椅子にかけながら机の上のガラクタをのける。
仕事にかかろうとしたその手を、編集長ががしんと掴んだ。

「君は、読んでいないって聞いたが、本当か」
「ええ。ご存知なかったですか？奴さんの条件で、
校正その他一切手出し禁止なんでね」
つまり、編集者としての仕事などほとんどやっていないということだ。
少年が社内用パスワードを使って勝手に小説サイトに投稿してしま

うだけなのだから。
通常、素人でもない限りこんなことはしない。
小説は編集者と作家が二人三脚で作り上げていくものだ。
今回はそんなものを一切無視した格好だ。

お叱りが飛ぶかと思ったが、編集長の表情は、そういう空気のかけらもなかった。
「なぜ、読まない。あれは、百年に一度の名作だ。
この歳になって心をここまで揺らされる事態が起きるとは、露とも思わなかった」
「読めとおっしゃるんでしたら、お断りしますね。
読んじゃいませんが、俺はどうせ青臭い恋愛物語だろうとあたりをつけています。
そういう小便くさい話は嫌いなんで」
「何を言っている、そんなレベルの話じゃあない。
全ての人間の深いコンプレックスをゆすぶってくる、そういう物語だ。」
ほうっておいたら、編集長は泣き出すのではないか。そう思った。
声を震わせ、目には力がない。
編集長はこんなに老けていただろうか？自分より一回り年かさだから無論若いはずもないが、
もっと活力といったものがあったように思う。

「妻に出ていかれてから、君は荒れ出したな」
編集長の手が伸び、今度は肩を掴まれた。
「出ていく前から、生意気でしたがね。それがどうしたんです？」
「そんな君に、私はいつも冷たかった。今ここでそれを詫びたいと思う」
編集長は机の上に倒れかかるようにしてこうべを垂れた。
面食らって、言葉がすぐには出てこなかった。

「一体どうしたってんですか」
「あの作品を読んで、幸せとは何かを考え直したんだよ」
「それはそれは結構なことです。しかし、仕事ができないんですが」
「構わん、仕事なんて所詮、生きるための付録に過ぎない」
まったくどうなってやがるんだ。仕事以外に趣味もないような中年が、
理解不可能な発言を繰り返している。

そういえば、社内全体の空気がどこかおかしい。
静かだ。みな、葬式にでもしているかのように、大人しい。
いや、気のせいだろうか。
とにかくこの場にいたらこっちまでおかしくなってしまう。
「外回りに行ってきますよ、仕事なんざ外でもできる」
「おお、行っておいで。無理はしないように」
編集長の優しい言葉を背中で受けて、外へ出た。
口やかましいこと以外取り柄などない男だと思っていたが、
こうなってしまうと、おぞましいくも思えてくる。

営業車に乗り込むと、またひとつ少年の言葉が脳裏に閃いた。
「僕はこれで人を幸せにも不幸にもできる」
そうだ、確かにそう言っていた。そして、もうひとつ続いていた。
「殺すことも」
まさか、な。
いつもは調子の悪いエンジンが一発でかかった。さて、どこに向かうか。
といって、行くべきところはひとつしかない。
あの少年とはなるべく顔を合わせたくはなかったのだが。

吹かない風

カローラワゴンは実にいい車だと思う。
営業車の代名詞みたいな車だが、なかなか気に入っている。
車検を三度も通った古強者だ。
低速で走っているとエアコンをつけただけでエンジンが止まるのには閉口するが、
それでも出版業界人特有の荒い運転にしっかりとついてきてくれる。
煙草嫌いの人間も乗るのだからと近頃禁煙車扱いにされてしまったが、
そんなことはお構いなしだ。
携帯電話とインターネットで最近の若い連中は仕事を大半済ましてしまう。
わざわざ車をあちこち回る人間は、自分だけになってしまった。

パソコンも得手でなく、携帯も上手に使いこなせないような人間は、
もはや化石と変わらないらしい。シーラカンスとあだ名されているのも知っている。
社内でおそらく自分と似た種類の人間は、編集長ただひとりだろう。

何本後ろ指を差されようとも、自分には新しいことを憶える必要などないのだ。
若くない。三十まではまだ若いと思えたが、不惑の歳を迎えると、
若くないのだということをはっきり認識するようになる。
新しい材料を手に入れてどうこうしたいとは思わなくなる。
今まで十分に溜め込んだ、手持ちの材料だけで生きていたいと思うようになるものなのだ。

近しく、感動した出来事などない。翻って、では絶望した出来事も近しくない。
人生は凪いでいる。強い風が吹き荒れる夜はもうこない。
歳を取るとはこういうことなのだと了解している。

では編集長はどうか。自分よりさらに歳を重ねているのだから、一層そうした兆候が強いと考えるのが自然であり妥当であろう。

ところがどうか。
あんな餓鬼の書いた小説ひとつで、
蹴たぐりでも食らったようにころりとひっくり返ってしまった。
豹変といっていい。ハッピー・エンディングとは一体どういう小説なのだろうか。
こんなにも渇き切った自分にも、ある種の衝撃を与えうるものなのだろうか。

カローラワゴンの古くさび付いたエンジン音が、頭の中で鳴り響く。
パワーウインドウもついていない骨董品だが、
そうだ、自分にはこれが合っている。合っているのだ。
変えてはいけない。自分を捻じ曲げるようなことはあってはならぬ。

「あなたには、もうついていけないの」
妻の一言が、脳裏に蘇った。もう顔も声も上手に思い出せないというのに、
その台詞だけがエンドレスのテープのように時折思い出されて責め立ててくる。

これでよいのだ。変わることを拒否した人間なのだ。

もちろん意固地に我を貫いていれば人生うまくいくなどとは思わない。
まっすぐしか走れぬ車は、緩いカーブでも激突してしまう。
周囲にあきれられることもある。
それでも、今まで生きてこれたのは、
先も分からぬ人生の地図の上で、無闇に曲がるような愚かな真似をしなかったためなのだ。
下手に曲がれば、道を失う。それが四十年生きてきて唯一確かに学んだことだ。

大通りを折れて県道に入る。このまま道なりに進めば、
少年のいる病院が見えてくる。
午後のラッシュに突き当たったか、さっきまで空いていた道は急に込み出した。
舌うちまじりに、車列の最後尾に車を寄せる。
と同時に、携帯電話の着信音が鳴った。
真美からだった。
「お父さん、お父さんはもう読んだ？」
何を、と問い返すまでもなかった。
吹かぬと思っていた風の気配を確かに感じた。
真美の声は小さく、いつもの真美の声ではなかった。
「私、やっと見つけたの。私のハッピー・エンディングを」

シャットアウト

風はいきなり吹く。
悪い風ほどそうだ。そうして根元から薙ぎ払うように、
何もかもを台無しにしようとかかる。

???　何があっても構わない。不幸は避けがたい。
ただ受け入れるだけだ。
しかし真美は。真美だけはダメなのだ。

???真美のいうハッピー・エンディングとはなんのことなのか。
学校の卒業？夢の達成？
それとも、文字通り、幸せな終焉のことなのか。

幸せな終焉？

???真美だって、それはいずれ迎えるだろう。しかし今じゃない。
ずっと、先のことだ。
「ハッピー・エンディングを見つけたっていうのは、いいことだ。
ただハッピー・エンディングってのは、どうした意味でなのかな？」
「ありがとう、お父さん。私、本当はずっと探していたのかもしれ
ないよ。お母さんが出ていってから」
?背中が騒ぐという表現があるが、あれは比喩ではないのだと思っ
た。
真美が今から話すであろう台詞が、恐ろしい。

「元気でね」

「まるで」

喉がつまる。
「まるで、お別れの挨拶みたいだ」
真美の返事はなかった。
「ハッピー・エンディングなんて、まだ先のことじゃないか」
やはり、返事はない。

ぱあん、とクラクションが鳴った。
いつのまにか車が流れ出していた。
背後のトラックが煽り立てるように車体を寄せて、
バックミラーいっぱいに広がっている。

??運転どころではなかった。
路肩に無理に車を突っ込み、
エンジンを止めた。
頭の中で、ぐるぐると言葉が回った。
さっきまで玉子焼きを焼いてくれて、明るく笑っていたじゃないか。

「私ね、あの小説に教えてもらったの。一度、大きなものを失った人間は、決して幸せにはなれないんだって。
??お母さんが出ていってしまってから、私はずっと、考えてたの。この不幸せはきっと穴埋めできないだろうって」
「真美に悲しい思いをさせた。親として、責任を感じている。ただな真美」
「いいの。お父さん、責めているわけじゃなくて。
ハッピー・エンディングを読めば分かるよ、
人生を幸せに終わらせるにはいくつか大事なことがあって、
それは過去を憂うことでも、
今ばかりを見ることじゃないの」
つまりね。
「どう終わらせるかなんだよ、大事なのは」

「それはそうかもしれないね」
努めて、冷静な声で答えた。成功したかは分からない。
「友達とよく遊んで、恋をして、結婚する。子供を育て、孫が生まれ、家族に囲まれて死ねたらきっとハッピー・エンディングだ。そういう具合に終わらせりたら、きっといいね」
ふふ、と真美は笑った。大人の女のような笑い方だ。
「違うよ。本当にまるで読んでないんだねお父さん。
子供は、ほとんど自殺しないの。何故か知っる？
子供は本質的に、楽天家だからなの。難民キャンプで大人たちは萎んだ顔でも、子供は笑顔でしょう？」
「そうだね、真美もまだ子供だ。笑顔でいられるね」
だから、まだ当分終わらせる必要などない。
「うん。そう、笑顔でいたの。今日は笑顔だし、明日もきっと笑顔で生きてる」
それなら構わない。何を悩む必要があろうか。
「だからきっと、今なんだ。
まだ明日発表の最終話を読むまで分からないけれどね。
つまり、子供のうちに終わらせることができたなら、
それがきっと、私のハッピー・エンディングだと思う」
「真美！」
お父さん。真美は私の声に重ねた。
お父さんが怒る気持ち、嬉しいな。
でもね。お父さん、お父さんは大人まで育った。育ってそして。

「お父さんは、今幸せ？」

返事がすぐに出なかった。数秒の間が空いて、
電話は、それきり切れた。

奔走

どうしていつも、忘れてしまうのだろう。
少しガタが来たとはいえ、
十分に健康な体を持っており、
当面生活にさしたる不安もない。
そして、家族がいる。
妻はいなくなってしまったが、
まだ娘がいる。

辞書を引けば違うことが書かれているに相違ないが、
幸せとはこういうことなのだ。

しかし、あの少年にとっては、
そうではないらしい。

認めなくてはならない。
あの少年は天才なのだ。
しかしあの天才は、当たり前の幸せを知らぬのだ。
人を惹きつけることはできても、
導くことはできないのだ。

殺意とは静かなものだと言っていたな。
家に帰ってから靴下を脱ぐのと同じくらい、決まりきったことのように、？ただ殺そうと思うものなんだ。
そうとも言っていた。
分かる気がしてきた。
真美にもしものことが起きたら、もっとはっきりとそれを感じるこ

とだろう。

しかし今はそれどころではない。
電話は繋がらない。
何度かけても繋がらない。
家に取って帰ろうか。
しかし、家にはおるまい。
真美の声には覚悟があった。

友達のところか？
しかし真美の友達など、
誰一人知らない。

焦れば、事態はさらに悪化する。
大人は、焦らない。焦ってはならない。
子供のように無闇に動いて、
傷口を開くような無様はしない。

整理しなくてはならない。
しかし一人ではそれもできそうもなかった。
頼りになりそうな人間？
しかし、こんな事態に対処しうる人間はいるだろうか。

シゲさんの名前が真っ先に脳裏に閃いた。
あの少年がある種の天才であるならば、シゲさんもまた、そうである。
シゲさんのところへいこう。
ここからならそう遠くない。
飛ばせば一時間といったところか。
電話をしながら事情を説明し、

知恵を借りればいい。

シゲさんならどうにかできるのか、定かなものではない。
しかし、他に頭が回らなかった。ハンドルをひねり、アクセルを踏み込む。旋回しおえてから、通話ボタンを押した。

電話をかけると、すぐに繋がった。久方ぶり、というやや寝ぼけた声が電話口から聞こえてきた。
「余計な挨拶は抜きにしますよ」
「いつもは挨拶してるみてえだな、用件だけ聞いて切るじゃないか」
「そうでしたね、とにかく簡単に事態を説明します」
「ハッピー・エンディングのことなら、少しだが知っているよ。そのことじゃないのかい？田所くんの担当だとか」
太い息がこぼれた。
「さすがですね」
「寝てばかりいるからなぁ、パソコンたぁ偉いもんだ。私のような人間にも世界を見せてくれる。もっとも、生きた情報とは言い難いがね。ところで、田所くんは岬アナは好きかね？」
「岬？朝の番組によく出てますね。別に好きではないですが。しかしそれが何か？」
「私はわりとタイプだったんだなぁ。可愛らしいし、ドジがいつまで経っても抜けないところが、たまらなく愛おしくてね」
「そうですか」
「朝彼女を見るとな、また今日が始まってくれたと感謝できる。健康な人間には分かるまいがね」
朝の番組は、これから始まる憂鬱な仕事の合図であった。
自分も病に倒れればきっと、
そう感じるのだろう。
「しかしもう見ることができなくなってしまって残念だ」

「残念？」
そうだ。しかし田所くんが好きではなくてよかった。好きな人の死は、たとい、テレビの中だけの存在でも辛いものだから。
シゲさんはそう答えた。
「今日の朝まですこぶる元気そうでしたが」
「そうだな」
「事故ですか、自殺ですか？」
「そうだなぁ、自殺だろうと思う」
「何故です？」
告白したんだとよ、とシゲさん。
「番組の司会の男、ちょっといい男だったろ？ナイスミドルというのかな。好きになってしまったらしいのさ」
「失恋くらいで死ぬだなんて」
それなんだがなぁ。惚けたような声が鳴る。
「田所くん、告白を受けたらしいんだ司会の男は。オッケーをもらえたから、死んだんだとな」
エンジンが少し焼けた匂いを放ち始めた。スピードメーターなぞ見るまでもなく、法定速度を越えている。これで警察に捕まったら笑い話にもならない。

大きな交差点から山に向かう道に折れる。ここからはしばらく信号もあまりない道だ。
「事故しないようにな、かなり飛ばしているようだが」
「気を付けましょう。いや、
今の話を聞いて少し冷静になりました。つまり、事態は最悪だってことです」
腹を括らなくてはならない。
岬アナを殺したのは、間違いなくハッピー・エンディングだ。
朝の番組中に、彼女はまだ読んでいないから読むと言っていた。
「シゲさんの知恵を貸していたたきたい。勝手ながら、今もうそち

らに向かっています」
「構わんよ、年中暇しとる。
しかしどうやら、田所くんの周りにも、何か影響が出たようだな」
「ええ。とにかくついてから
ご説明しますよ、一切合切。
簡便にいうと、シゲさんだけが頼りです」

携帯電話の音が途切れがちだ。？
「こんなジジイに頼るなんざあ、相当ひどい事態なんだな」？
電話の向こうのシゲさんの声にはざあっと雑音が混じる。？
車の速度を出しすぎなのかもれないと思ったが、アクセルを緩めなかった。？
「この事態に、タイトルをつけるなら、なんだい？」？
「そうですね、まさしく、ハッピー・エンディングってところですよ」？
ちょっとくらい車飛ばしてみたところで大した意味はない。しかし急がずには？
おれなかった。？

運命はノックしない

運命はノックをしない。

誰の言葉だったか。

きっと誰にとってもそうなのだろう。予兆を示しず、突然に湧き上がって人間を振り回す。

妻が出て行ったのも唐突であった。

妻は、大事にしていた。その自覚があった。

元来ぶっきらぼうな自分だ。しかし妻には、とことん惚れていた。

惚れたものには弱い。

仕事には荒かったが、それは懸命さのもう一側面である、と思っていたし、妻もそうだと認めてくれていた。

家庭ではその分努めて優しい振る舞いをしていた。

しかし、唐突に、妻は冷めた。

妻にとっても、きっと思いがけないものだったのではあるまいか。

真美にすら、あまり執着はないようだった。新しい場所で、新しい生活をしたいと言い出した。引き止めたが、聞かなかった。まったくの取り付く島のない格好で、頑なであり、そんな妻を見たことはなかった。

「真美には、なんと言ったらいい」

「幸せを掴んでね、と言ってあげて」

ただそれだけだ。残した言葉は少なかった。次の日には荷物をまとめ、真美と特段の別れの席も設けることはなかった。

妻には、男がいたのだろう。
月並みな展開だが、そう考えるのが自然だ。
妻の心はつっかえ棒で支えられていたのだと思う。予兆はなくとも、内に潜めたる何かがあり、それは家庭だとか結婚だとかいうつっかえ棒によって支えられていたのに違いなかった。
そして唐突に、棒は外された。あるいは、支えきれず、折れたのか。判断するには材料が足りなかった。

人間にはみな、そうしたつっかえ棒があるのだろう。皆さまざまな荷物を抱え込んでいる。それらは責任であるとか、義理であるとか、いろいろな名前はつけられてはいるが、捨て去ることも難しく、それなしで生きることは許されず、さまざまなつっかえ棒を用いてその重さに抗うのだ。

そして、何かのはずみで、棒はぽきりと折れてしまう。

真美の心の支えを奪ったのは、なんなのだろう。

??車はいくつかのトンネルを抜け、すっかり山の奥に入った。しばらく左右に砂防ダムのダム湖が現れる。
アクセルを緩めて、湖の景色に少し見とれた。

湖を抜けると間もなく、シゲさんのいる病院が見えてくるはずだ。

山から押し寄せる木々に、
押しつぶされてしまうのではないか。
そう思えてしまうほど、建物は森の中に沈んでいた。
蔦か何かが押し寄せた木々の上にはびこって一層陰鬱に見えた。

?? 以前から、こうだったのか、記憶が曖昧だ。とにかく、何年かぶりに訪れた。ひどく様子が変わったようにも思えるし、相変わらずにも思える。

シゲさんの病室は一番上の階に移されていた。シゲさんの希望で、定期的に部屋を変えているのだという。

「探しましたよ」
開口一番そういうと、シゲさんはベッドの上から腕だけをあげて手をゆっくり振った。

「一年中同じ景色じゃ、嫌んなっちまうからねえ」
「確かに」
上着を抜ぐと、ふっと力が抜け、スツールの上にどすんと崩れた。
「お疲れみたいだな」
ベッドの脇に置かれた鏡に、自分の顔が映った。確かに一気に老け込んだ気がする。
シゲさんのほうがかえって元気にみえた。

「急ぐんだろう?」とシゲさん。「気遣いや挨拶は抜きだ。本題にとっとと入ろうじゃないか。俺に、何をして欲しいんだい?そのベッドから動けない坊やと、肉弾戦でもするのかな?」
シゲさんは同じくベッドに張り付きっぱなしの体を震わせて笑った。
「娘の話はしたことがなかった気がします」
自分の声が、自分のものでないように聞こえる。
「ハッピー・エンディングを読んでから、おかしくなりました」
ほう、とシゲさん。
「詳しく、話してごらん。小さな話でもいい、こんな寝たきりの年寄りにも、力になれることがあるかもしれない」

詳しく話す、といっても正直まだ自分でもどこまでの話なのかが定かでない。定かではないがとにかく話した。よもやまに話すより他しようがない。話しながら、これは全て夢ではあるまいかという気すらしてきた。

「ふうん、面白いな、しかし真美ちゃんだったかな、性急にことを運ぶことはないと思うよ」

なぜなら、とシゲさん。

「ハッピー・エンディングの最終話が投稿されるのは、まだ少し先らしいからね」

「先？」

「そうさ、儂も読んでいる。流行には目が無くてね」

血の気が、すっと引いた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1667o/

ハッピー・エンディング

2010年11月6日13時27分発行